

素直で繊細で活動的な生徒さんが多いなっていうのが印象です。

語り手 山村 和恵（養護教諭） 聞き手 上野 あゆ美

*

保健室から見た本校の変化

―まず保健室から見て立命館守山（注…以下「立守」と称する）って、どんな雰囲気があったりだとか、どういう変化があったのかとかを色々教えていただきたいです。

私は、小学校から高校まで様々な学校で養護教諭をしていました。そして二〇一六年から立守で勤務させてもらうことになりました。滋賀県って公立が多くて、その公立の中でも夜間高校とか、通信制の学校とか、工業高校とかとかに勤務していたので、全然タイプが違うなとは思いました。最初、立命館の生徒は、おとなしく物静かなタイプの人が、少し多いのかなって予想はしていたんですけど、そうではなくって、すごく元気で、素直で繊細で活動的な生徒さんが多いなっていうのが印象です。あと、この一〇年間でやはりコロナの影響がすごく大きかったかなと思うんですね。それは立守の生徒が変わったっていうのではなくて、社会が変わってきたなっていう風に思っています。二〇二〇年から二〇二三年ぐらいがコロナだったとすると、あのときの三年ってちょっと思い出せないっていうか、思い返すことがしんどいと感じていました。すごく学校の形態が変わったなって思っていて、私は、三年間みんなと一緒に乗り越えてきたという感覚がすごく強く、立守を過ごしてきた、

教員なんだけど、どこか少し仲間みたいな、そんな気持ちで生徒のこと見てるなって思っています。

*

コロナ禍での本校の様子

―やっぱり学校って、コロナのときは今までと違ったんですか。

まず、本校は、オンラインとかが比較的身近にあった学校だと思うので、最初にオンラインになったりとか、時差登校があったりしました。初期の頃は、段ボールで一人ずつカバーみたいなのを机の上に乗せて、飛沫とか感染を防いだりとかもありました。

―みんなですか？

そうそう。人との距離をどうやって取るかとか、ものすごく難しかったんだけど、他の学校に比べてオンラインとかを早めに導入したおかげで、そういう配慮はできたとはいえ、活動が好きな立守でもあるし、やっぱり生徒からも登校したいっていう声も多かったんで、その感染対策と学校生活の両立が保健室の立場からしたらものすごく難しかったなっと思っています。

―学校行事とかもですか？

今みたいに、文化祭が自由にできたわけじゃなくて、ほんとに制限もされたし、自分たちだけで活動をしなればいけなかった。当日は、部屋を密にできないし、来場者も制限されていたから、生徒だけの文化祭の時もありました。だからすごく印象的だったのが、一般の人の来場がオッケーになった時には、そのとき（コロナ禍）に入れなかった保護者の方とか卒業生の人が久しぶりに来て、「こうやって先生と出会えて嬉しい」って言って泣いてくれて。あのときはすごくみんなも必死で、これが正しいのかどうかなっていうふうに誰もが正解のない中でやって

きたからこそ、私はその後に文化祭をした時の感動っていうのは、来てくれた人から運んでもらって。そういう言葉を、そのときにやっとなんか聞けることができて。コロナってまだ収束はしてないけれども、コロナと付き合っていくことができるようになったのかなというふうに思えました。

―一応、学校行事はあったんですか？

ありました。でも、制限もいっぱいあったので、なんか恨まれたこともあったっていうか。保健室が中止してるんじゃないかと言われて。でもそんなことはない。保健室はやっぱり感染をしたり、感染かもしれないという場合やあとは、後遺症かもしれないという話も聞く。

―はい。

一番そのリアルに感染状況を聞く場所なので、先生の立場としては、行事が全てオッケーっていうふうになかなか言えないこともあったので、なんかその狭間ですごく自分は悩んでたなっていう感じはしていました。

―いや、辛かったですよね。

いやみんながですよ！ 先生達だけじゃなくて。

―私もですよ！

うん。そうだね。マスクが解除になる、ならないっていうときも、すごく難しくて。私も養護教諭だからマスクなしで話すっていうことに、自分なりの葛藤もすごくあって。とはいえ、ずっとマスクをするしんどさもわかるし、でも表情を読み取れない部分もあったりとか、お互いね。そのあたりもすごくほんとに悩みに悩んだ三年間だったなっていう感じです。

あとコロナの時にやっていたのは、ピピ姉さんとマスコ（注…立命館守山保健室のオリジナルキャラクター）っていうキャラクターを作りま

した。当時みんなと出会えないし、かと言って、ずっと家にいるのってしんどいだろうなって思っていて、何か届けられないかなって考えていたんです。一緒に仕事をしている岩本養護教諭は、すごく絵が上手な人だったんです。二人で、保健室のキャラクター作って、なにかできないかなって。そして、考えた結果、漫画を一日一枚作って送っていたのです。生徒のみんなが、最終的に立守に戻ってくるまで、やり続けようかっていう感じで、定期的にずっと、あと何日ぐらいかなとか、みんな元気にしているかな？みたいな感じで。

―すごい。すごいですね。

クラッシュで漫画を送ると、みんながリアクションしてくれたり。顔は見えなかったですけど、繋がりたいのを感じたり、なんとなく一緒に過ごしたなっていう感覚が私の中にあるかなって。

―そうですね。今までの中で一番大きい出来事じゃないですか、コロナって。

みんなにとってもそうだったんよね。

＊

コロナ禍の影響による学校の変化

―ちよつと繋がるんですけど、やっぱりそのコロナになって、私の回りでは学校に行けない子とかが多くて。そういうこともありましたか？

もちろん、コロナが社会で蔓延していつて。だからこそ、ちよつと行きづらくなったり、感染してその後、後遺症がきっかけでちよつと学校行けないとか、あとはマスクが外せないとか、音が気になるとか、今まで以上に身体的なところでもしんどくなったりとか。あと感染が怖かったりっていうのもありました。

―そうですね。

それはすごくあったかなと思うのですが、逆もあって。感染とかそんなじゃないけど、今までちよつと登校しにくい人が、みんなも休校でお休みをしてるから、逆に気持ちが悪くなったたり、今までちよつと学校行きづらかったけど、みんなも休んでるから、同じ感じでちよつと安心したっていう子もいれば・・・Zoomってできたじゃない？

ーはい。

もうすごい画期的だったし、そのZoomで、今までだったら教室に行かなければいけないものが、それがZoomっていうことで参加できるっていうのに、すごく嬉しくなつて安心して、それがきっかけで、ちよつと学校行ってみようかなっていうような人も中にはいて。それは私も新たな発見っていうか、一人ずつ置かれてる状況とか心の状態っていうか、違うんだなっていうのを改めて思いました。

ーそういうこともあったんですねー。

そうそうそう。あったねー。

*

保健室での大きな挑戦

ーこの一〇年間の中で一番大きい出来事ってそれやと思うんですけど、それまでも色々あったりしました？

コロナ前に、本当に保健室って見直した方がいいのかなっていう風にちよつと考えていました。本校の保健室は、どちらかというとオープンな保健室であるのではないかなとは思っていました。いつ来てもオープンだし、先生が判断するのではなくって、自分でその日の過ごし方を決めてもらえるような保健室を目指していたので。でも私が初めて立守に来たときは「先生、休んでいいですか。」とか「どうしたらいいですか。」っていうような、割とそういう生徒さんが多かったですけど、そ

こで私はすごく違和感を感じたのね。自分がしんどかったら自分でどうしたいか決めたらいいし。ここの保健室は先生のものじゃなくって、みんなの一人ずつのものなのに。

それから自分自身で、その一日の使い方を決めてほしいという願いもあり、自分が本当はどうしたいか、保健室で生徒とよく話しました。休んでから教室に戻ったり、帰宅したりなどして体調を整える・・・そこを相談していましたね。本人が「どうしたいか」という意思を尊重していましたね。すると、だんだん自己管理というか、自分でどう調整していくことができるようになっていったと思います。そして、それができる立守生なんだって、改めて感じました。

さらに、コロナや、保健室の様子もきっかけになって、私はその保健室っていう場所の存在意義をどうしたらいいかなーと自分で問い直した時に、やはり生徒にいろいろ聞く機会が必要だと思って、話し合う機会を作ったんですね。その時に集まってくれた生徒の皆さんは、やっぱり対面って緊張するよなとか、学校はすぐ発表が多いし苦手だなと思っているのにどうしたらいいの？っていう気持ちになっちゃうと正直に話してくれたのです。その声を聞いて、何かできないかなーと思ったことが後の「デジタル保健室」っていう開発に至ったんですね。それは私にとつたら、とても大きな出来事かなっていう感じがして、特に生徒と一緒に作れたこと。これが私にとって一番大きいことなのかなと誇りに思っています。いろいろな生徒もチャレンジできるけど、先生らもチャレンジできるっていうのが、立守のいいところかなっていう感じがする。

ーデジタル保健室っていつ頃作られたんですか？

最初は二〇二二年。コロナ禍なんですけど。休校になった時に生徒が保健室に來ないし、ちよつと保健室見直そうかなっていう構想が以前か

らあったんですね。休校後は、保健室に来る人がいっぱいになって、多くなってきたから、生徒が休める場所っていうのを作りたいなっていうふうに思っていて。構想は二〇二〇年からあったんですけど、具体的には二〇二二年くらいから動いたっていう形で。さっきも話した通り、どんな保健室がいい？って、ほんとにそこから始まったんです。

—すごいですね！

だから保健室っていうのは、先生が考えるだけの場所じゃなくって、生徒に考えて欲しいなって。ほんとにスターバックスに行っている感覚で使っていてほしいと思っていました。気軽に、保健室に行くことを嫌がらずに、しんどいからとか、怪我したからいくだけじゃなくて、そんな保健室にしたいなっていうふうに思って、再スタートした感じです。さらに、保健室もあるし、オルバ（注：利用の目的や理由を問わず、誰でも自由に利用できる本校のフリースペース）も作ったりして。すごくこの何年間は、保健室の周辺の場所を生徒と先生たちと一緒に作らせてもらったなって、それがコロナよりもっと自分が印象に残っているかな。—この学校の保健室は行きやすいっていうか、今までと保健室に対する考えとか気持ちが変わって。ううん。

今は、どうする？帰る？休む？など色々提案します。生徒が決めたことに、先生達は基本的には引き止めない。コロナ禍では、保健室だけの決まりじゃなくって、学校全体として決まっているところに、少し従わなければいけない時もあったと思います。（感染症対策では基本的には保健室は1時間の使用）その辺はやっぱり苦戦したと思います。みんなにとつての保健室っていうのって、一人ずつ違うんだろけれど、まずは窓口っていうか、怪我とか病気だけではない使い方ができないかなと思った実践が、今の状況かな。

—うんうん。学校に行けない子ってどうしてるんかなってずっと思ってたんですよ。保健室に行って、誰かとコミュニケーション取れる空間があるんがすごくいいなって。

そうやね。なんか保健室がそういう一助になれてもいいかなっていう反面、保健室だけではなくって、そういうところがたくさん学校にある方がいいのかなっていうふうに思ったり。その一つの方法が、デジタルを使用すること、そしてオルバなんです。

私が、そのオルバっていう場所を作ったのは、保健室メンバーだけではなく、教員ではない関係のひとと関わる、いつでもどんな理由でも来ていい場所も作って、行きにくいなと思ってる人が、ここやたら行けるかな、みたいなのを選択してくれたらいいなと思って。今日は保健室で過ごすけど、今日はオルバでもいいわみたいな。そういうことができる、それがきっかけで教室に行けたりするかもしれない。ただ私は基本的には、教室に行けることが全てとは、あんまり思っていないのね。

こう思うようなきっかけは、きっと私が、前の学校でも通信制で勤務していたからだと思います。学校を転学したからと言って、別に何か失敗してその子の人生が終わったんではなくって、なんか新しい人生を踏み出せる、すごく勇気のある人たちがばかりやっとなってるいう風に思っていたんですよ。高校やめて次の学校行くって、なかなか勇気があるかもしれないですけど、私自身がそんな生徒たちと関わりながら、すごく狭い世界で自分は生きてたんやなって感じたんです。その新しい一歩を踏み出している生徒たちを見ると、教えられることもすごく多かったのね。

だから、私は立守にいながら、でも立守にあんまりこだわってないところもあって。世間は広いっていう気持ちは持っているんだけど、そんなふうには思えない人もたくさんいるから。その窓口をなんとか増やしたらいけるかなと思って。保健室もそうだし、オルバっていうところも一緒に保健室改造の時に作らせてもらったっていうのは、そういう意図もあるかなっていう感じがする。色んなことを重ねて、また新たな選択ができるようになったところは、すごく私も一緒に考えられてよかったかな。

—うんうん。すごい良いです。良い保健室ですね。

いやいや！ 先生の方が教えられることが本当はかなり多くて。うちの特徴なんですけれど、本校を転学して違う学校に通っている人も、文化祭によくきてくれるんだよ。私、これは立守ならではのかなと思っ
ているんだけど・・・。

—でもやっぱりこういう環境（誰かと気軽にコミュニケーションが取れる環境）があるからじゃないですか？

うんうん。でもきつと立守の何かがそうしてくれているのかなと思っ
ていて。先生であつたり、同級生であつたり。そういう人が分け隔てなく付き合ってくれる土壌がきつとある感じがする。だからこそ一番初めに言ったような、立守の子は平和で繊細な感じがするっていうのはそういうところで出ているのかなって。

*

保健室から見る立守生徒の雰囲気

—いやすごい良いことですね。保健室から見て、この立守の生徒とか雰囲気はどういうふうに感じますか？

そうね。何が平等だろうっていうのを、もしかしたら常に意識してくれているのかなって思うくらい。今、多様性とか言われている中で、すごい難しい時代だなと思うのよね。その中でどうやってお互い心地よく生活できるかっていうのを、生徒の中で常に意識しているのかなって。もちろん意見の対立は、当たり前だと思っし、もっと意見対立してもいいかなって思うくらい。でもその先には、きっと相手のことを思いやる気持ちがみんなに備ってるんかなっていうのは色んなところで感じます。そういうふうには、常に相手のことを上手に距離感をとって意識している人が多いんだなっていうのはすごく感じるので、それが校風としてすごく出ているのかなって思うね。

—なるほど。すごく素敵な話です。あとね、学校に行けない生徒さん多いっぱいいと思うんですけど、こういう風に対応しているんですか。

その人の置かれている状況や気持ちとかを、まずは話してもらえりょうな環境を作ることが大事かなと思っています。先生と話すことを苦手と思っっていたり、学校に行きづらいつと感じている人って、色んなところ
で理由を聞かれてしまうとっ思うんです。聞かれたくないことってたくさんあると思うのね。それを早く解決しようと思っつて、急かさないうに、でもどんなふうに感じているのかを、少しずつ言語化できるようなお手伝いをできたらいいかなと思っっているのね。だからちよつと学校行きづらい人には、慎重に時間かけるようにしています。

私自身は、あんまりそういう焦りはなくて、タイミングかなという感じもするので、それをちよつとその子のペースに合っわしていきませんかというように、その生徒に合っわせた、環境づくりを心がけています。

今、世間では、そういう受け入れ先がすごく増えてきたっていうのは、一ついいことではあるなと思っただけど、私はまだ学校内でも色々で

きるかなっていうことはすごく思ってた。だからこそ、生徒と一緒に考えていきたいなっていうのは、私の中で大事にしていたことです。保健室やその周辺の展開であったり、デジタルを使ったり。ちよつと学校なんだけど学校じゃないような、なんとなくそういう場所があるっていうだけでもいいのかなと思っています。

＊

これからの保健室

—今なんか考えてることってあったりするんですか？

デジタル保健室は結構いろんな展開ができていて、AI養護教諭っていうのはもう展開しているんですよ。それは先生の代わりっていうんじゃないかって、ちよつと聞きづらいなと思ってることを尋ねたりとか、相談ではなくて雑談するみたいな。その開発して実践しているのが一つ。

もう一つは、そのデジタル保健室がもつと展開できないかなっていうことで。アバターを使って、発表ができないかなと考えていました。去年の文化祭でもちよつと試したのね。人前で発表するっていうことって、緊張してちよつと苦手な子もうちにはいるので、その生徒のためになんかできないかなって思ってた。事前にアバターで発表を録画して、探究（注：本校で行っている探究授業の一環）の発表をそのアバターにしてもらったんだけど、これ結構使えるやんっていうふうに思ってた。そういうのはもう面白くて、逆にいいなと実感しました。

あと、その保健室の外に芝生を作ったんですよ。そうしたらみんながゴロゴロしたりとか。外のカフェみたいな感じにして、ちよつとアウトドア化してるのね。カフェの外でお茶するみたいな感覚でお昼休み、結構みんなここで食べています。椅子とか持ってきたりとかして。

最近すごい感じるのが、この真ん中に保健室があって、この周りがすごく賑やかになってきたんよね。で大事なのは、保健室の先生はそこには入らないのよ。真ん中で仕事しています。生徒はこっち（入口側）では、身長を測ったりとかデジタル保健室触ったり。いいなっていうふうにちよつと思ってる。保健室に行くことを緊張するんじゃないかって、雑談の延長でみんな喋りに来てくれる。こういう保健室があるのがいいなと思ってたので、そっちの方が喋りやすい？

—そうですね。

するとこの間、みんなが自らレジャーシート持ってきて、みんなでお弁当食ったりすつごい楽しそうやったのね。そういうふうに保健室使って欲しいなって思ってるから。そういう保健室だけでない保健室っていうか、そういう使い方をできるように、今いろいろ試作しているんだけど、これからも、こういう新しい展開もできるかなっていうふうに考えているところですよ。

—うんうん。いやとても濃い話を聞かせていただきました。ありがとうございます！

いやこちらこそありがとうございます！

（次ページへ）

【感想】

本校の現状と課題に向き合い、他校とはまた違った保健室のあり方を考えて開発されていることを知り、本校の新しい魅力を発見することができた。学校に来づらい生徒やコミュニケーションが苦手な生徒との関わり方についても学ぶことができたと思う。私は保健室に行く機会が少なく、直接関わる機会もあまりないけれど、目に見えることだけでなく、私たちの見えないところでも生徒のために考えてくださっていることを知って、日々感謝していきたいと感じた。



右：聞き手 上野 あゆ美
左：語り手 山村 和恵さん